本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第60号　2021年3月1日（毎月1日発行）

ふるさとの開拓者③

「松花江比婆開拓団」後編

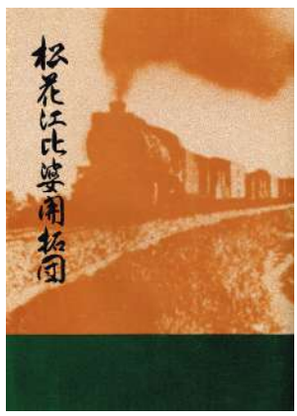
（小田研一・永岡亀太郎 共著、昭和六〇年発行）

希望に燃えての新天地の開拓は、日本の敗戦で暗転する。現地の人々からは侵略者として、激しく糾弾されることになる。

小田研一団長は昭和二〇年七月に予備役中尉として招集され、新京六〇〇部隊に配属されていた。その他にも兵籍であるものはほとんど招集され、開拓団の大部分は老人や婦女子といった有様だった。

永岡亀太郎さんは、召集令状を交付する任にあったために召集されず、数少ない成人男性として、敗戦後に団員を守るために奮闘することになる。武器類はすべて押収されている。土匪（土着の盗賊団）に襲われたときは、肥料のために溜めていた糞尿を屋根からバラまいて撃退した。下肥は日本人独特の糞尿処理法で、現地の人はこの習慣をとても嫌がっていた。

ソ連軍に拘留されていた小田団長も二一年一月に釈放、貨物輸送の人夫の不足が理由で、シベリア行きを免れた。



満州の大原野（「松花江比婆開拓団」より転載）

開拓団に戻った小田団長は、独創的な知略で危機を乗り越える。第二部の永岡さんの手記「鍬の戦士の想い出」に詳細が書かれている。

暴徒が襲ってくるのは、物資を持っているから盗りにくるのだと、必要品以外はすべて売り払った。「女を出せ」と要求されたときは、独身女性が仮の夫婦関係を装ってその場を逃れた。儒教の影響が強い中国人は主婦不要（シーププヨー、人妻は不可）。その仮の夫婦関係は下関まで帰れば解消されるので「下関条約」と呼ばれていた。しかし、この仮の夫婦関係が機縁になって、実際に結婚したカップルもいくつかあったという。

敗戦から約一年、引揚命令がようやく出た。コレラの蔓延で、新京の病院で待機しているときに、小田団長の長女が亡くなった。松花江開拓団で一番はじめに生れた子だと祝福され、藤沢熊登綜合開拓団長が「一江（かずえ）」と命名してくれた。母乳が出なくなっての衰弱死だった。

無蓋貨車で錦州省の収容所に到着。ここでは、永岡さんの長男、満君が亡くなっている。栄養不足もあって、体力のない老人や子供から倒れていく。帰国船の中では、佐世保入港を目前にして、永岡さんの母親が亡くなっている。

比婆開拓団の在籍数二四五人に対して、引揚者は二〇一人。未帰還は四四人でその内訳は、入植地で死亡が一六人、引揚中に死亡が二三人、現地応召戦死が四人、入植地への残留が一人。

他の団はもっと苛烈である。「満州開拓史」の統計によると、佐伯団は在籍三六二人で帰還が一四〇人、高田団は在籍二九九人で帰還が一二三人、帰還率が五割を切っている。入植地が北に位置していたので、ソ連軍に蹂躙されたことも影響している。

国策に翻弄されたふるさとの開拓民の悲劇の歴史だが、どんな状況でもくじけない、希望を失わない民衆の逞しい記録でもある。この活力が、日本の戦後復興を支えたのだと信じる。今の日本に、今の大衆に、今の自分に、そんな生命力があるのだろうかと自問した。

鎌田慧『自動車絶望工場』
――高度成長を支えた過酷労働

70年代は、ノンフィクション賞が次々と創設されました。ノンフィクションへの関心が高まったのです。めまぐるしく変動する社会へと、目が向いたとも言えます。

そんな中、大宅壮一ノンフィクション賞が始まったのが70年。同賞の有力候補だったのが鎌田慧（さとし）『自動車絶望工場――ある季節工の日記』（73年刊、徳間書房・他）でした。ですが、受賞には至りませんでした。「取材の仕方がフェアーではない」というのが理由でした。つまりトヨタの自動車工場に「臨時工」と偽って潜り、内部をルポしたからと言うものでした。「じゃあ、トヨタの広報の案内で、行儀よくルポしろというのか」と、後でノンフィクション作家の間で、同賞が物笑いの種になりました。

臨時工となった34才の鎌田慧は本工、見習工、実習生に混じって季節工として相部屋の寮生活をしながら、日々の観察を日記形式で書き綴ります。72年9月から5ヶ月。当初は、告発の書と言うより、働く喜びとは何だろう、と工場労働への好奇心に満ちています。しかし、ほどなく、ベルトコンベアの前に立ち尽くしてしまいます。見るとするとでは大違いな作業だったのです。

朝6時にベルトが動き出すと、11時までの5時間、正確に1分20秒ずつ、組み立てる部品が流れてくるのです。11時にラインが止まると、みんなサッと持ち場を離れ、はち切れそうになった膀胱を空にします。急いで食事をし、11時45分、またコンベアが動き出すのです。

これが日本第1位である自動車メーカーの“近代的プロレタリアート”の生活なのか、と嘆じつつ、「とにかくこれに慣れなくては」と頑張るのです。

が、鎌田慧はほどなく、この単純作業に悩まされます。「労働者は機械ですらない。機械的な動きを強いられた人間であり、機械より安くて、取り換えが簡単な部品であり、使い捨てられる電池なのだ。古くなれば充電もきかなくなる」と思うのです。

辞める季節工が多いのも気になり出します。2ヶ月後、身近なところでは、6人入って3人辞めました。1人は、退職者用のアンケートに「仕事がきつい割に給料が少ない」と乱暴な字で書いていました。

辞める日も働く。「あと30分か。シャバへ帰れるんだなぁ」とライン仲間。5万円余の給金を手に工場を出ます。「解放感、というより、疲れと虚脱感。鈍い痛みを持つ右手首。筋ばった右手の指。細かい鉄片が突き刺さった掌。疲れの溜まった背の筋肉。胸やけする胃。これがぼくに残されたものだ」と。

最後にふり返って、ベルトコンベア労働の忌まわしさを、こう言い切っています。「連帯して労働をしていながらも、他人の労働を振り向き、話しすることもできないほどに孤立させられている」と。そして、唯一の安息所である家庭へ逃げるようにして帰るのだ、としています。

この時代から半世紀、大企業のベルトコンベア労働の多くは機械に取って替わりましたが、他の多くの小さな現場では、流れ作業の過酷さは克服されてはいないのです。

次回は有吉佐和子『複合汚染』。

また読んでみたい本㊿
――――――青年たちに

音谷 健郎

【徳間書店版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月１冊ずつ紹介しています。

第58回は、鎌田慧の『自動車絶望工場』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧･庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「そして、バトンは渡された」

瀬尾まいこ 著　文春文庫

優子は幼い頃に母親を亡くして、自由奔放な継母の梨花と楽しく暮らしていたのだが、父親の海外赴任が原因でその両親も離婚。日本での梨花との生活を選んだのだが、経済力のない梨花は再婚を繰り返す。あげくは姿を消してしまい、高校生になった優子は、20歳しか離れていない変人の“父親”と二人暮らし。

暗い不幸話のようだが、登場人物がことごとく好人物ばかりで「渡る世間に鬼はいない」状態、幸福な気分にさせてくれる。殺伐とした世の中だからこそのファンタジー。こんな人になれたらいいなと思わせてくれるだけでも、道徳の百倍は効果がある。小説の底力、2019 年本屋大賞受賞。

「寡黙なる巨人」

多田富雄 著　集英社

66歳にして半身不随になってしまった人物の独白。脳梗塞で右半身不随となり、嚥下障害や言語障害を併発。自分の唾液でむせて、不用意に飲んだ少量の水で溺れてしまう。一夜にして無力な虫になってしまったカフカの「変身」の実話版である。

著者は世界的な免疫学者で東京大学名誉教授、冷徹な目で自身に起きた事象を詳細に記録。「まるで私はチューブで栄養物を入れられて排泄物にする、糞便製造機のようではないか」、絶望の詠嘆には身震いするが、著者は地獄の底から這いあがる。そして、リハビリで無様にあがく自分の中に誕生した「巨人」の存在を自覚する。小林秀雄賞受賞（2008 年）。

「家族の言い訳」

森浩美 著　双葉文庫

家族をテーマにした8つの短編が収載されている。登場人物に寄り添うような繊細な心理描写に、うまいなあと思わずうなってしまった。みんな不幸な話ばかりだ。どこかで聞いたような話でリアリティがある。だけど、最後にはちゃんと一筋の希望が用意されている。ありきたりのハッピィエンドではなく、ほのかな光……、そうホタルが闇を照らすような感じで、奥行きがあるのだ。

著者は売れっ子の作詞家としても知られている。どんな歌詞を書いているのだろうと検索してみると、アイドル歌手の名前がずらり。ジャパニーズブルース、じんわりと胸に響く演歌も書けるんじゃないのかなあと独白。

どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば 3 割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

虫と草木と人びとと㊽　中村慎吾

比婆山連峰の自然（3）

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

絶滅危惧Ⅱ類に指定されているオオヤマレンゲが比婆山にあった。これは御陵の東側にある登山道を御陵から約10m北へ進んだあたりの登山道の路傍に自生していた。しかし、西城町が山岳マラソンを開催するに当ってマラソンコースを整備した際、このオオヤマレンゲは伐採され、消滅している。土井（1983）はオオヤマレンゲの自生地として比婆山を挙げているが、これは土井自身の採集によるものではなく、誰の報告に基づくものか、不明である。

御陵附近にあったオオヤマレンゲ（1976年6月中村撮影）

比婆山連峰から記録されているイワキンバイとヒモカズラは絶滅危惧Ⅰ類、ミヤマツチトリモチ、キュウシュウコゴメグサ、ツクシコゴメグサ、イワショウウブ、トキソウは絶滅危惧Ⅱ類、イヨフウロ、ダイセンキスミレ、ウラジロハナヒリノキ、キヨスミウツボ、ホソバヤマハハコ、マイヅルソウは準絶滅危惧にそれぞれ指定されている。

3．比婆山連峰の鳥類

比婆山連峰の鳥類は、1970年から1974年までの5年間、立烏帽子山駐車場から御稜までのコースで調査が行なわれ、1988年は出雲峠から烏帽子山への登山道を基点として立烏帽子山駐車場まで8コースを設定し、延べ15回にわたってラインセンサス法による鳥類調査が行なわれた。

表1は1970年6月から1974年6月の調査結果と、1988年6月の調査のうち立烏帽子山駐車場から御陵までの調査をまとめたものである。

表1から分かるように1970年～1974年の調査結果と比べて、1988年の調査結果のうち、種類数は変わりないが、1988年は出現個体数が1974年に比べて49・2％も減少している。特にブナ林の標徴種ともいえるゴジュウガラ（中村原図）は、1970年～1974年の5年間、5～9羽が観察されていたが、1988年6月の調査は2日間行ったのにもかかわらず1羽しか確認できなかった。

そこで1973年と1988年の両年、出現率・出現個体数・優越度指数を出現率上位5位までの鳥類について比較した。その結果を表2に

表1 種類数出現個体数

調査年	1970年	1971年	1972年	1973年	1974年	1988年
種類数（出現個体数）	23（80）	26（189）	27（154）	27（137）	27（120）	26（59）

表2 1973年と1988年の出現率・出現個体数・優越度指数

調査年	1973年の調査			調査年	1988年の調査		
出現率等／種名	出現率	出現個体率	優越度指数	出現率等／種名	出現率	出現個体率	優越度指数
ヒガラ	100	12.56	12.56	カケス	66.66	3.82	2.55
シジュウカラ	100	9.80	9.80	シジュウカラ	60.00	3.82	2.29
コガラ	100	7.11	7.11	ヤマガラ	53.33	3.82	2.04
カケス	100	5.22	5.22	ウグイス	53.33	5.19	2.76
ヤマガラ	100	3.70	3.70	ヒヨドリ	53.33	6.01	3.20

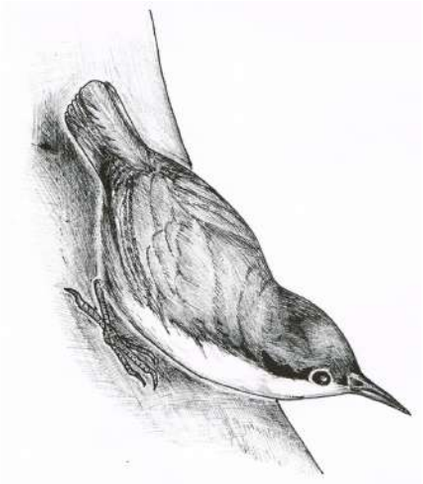
数値は全て％

示す。ちなみに１９７３年の総出現種類数は43種、１９８８年は45種であった。

表２から分かるように出現率上位５位の鳥類がすべて１００％となっているのに対して、１９８８年の場合は66・66％～53・33％となっている。これは１９７３年の総出現個体数が１３７７羽であったのに対して１９８８年は３３６羽と、１９７７年の24・４％に激減している。つまり、鳥類の生息密度が著しく低下していると考えられる。しかし、その原因は不明である。

出現個体率と優先度指数からみて、１９７３年の場合、カラ類が優占しており比婆山本来の森林の姿を反映した鳥類相を示していたと考えられる。中村原図のゴジュウカラは比婆科学教育振興会が「県民の森―自然ガイド―」を１９７９年に発行した際、小川光昭（１９３３～２０１０）が比婆山で撮影したゴジュウカラの写真によって描いたもので、同書28ページに掲載されている。ここには小川が「ヒガラ、コガラ、シジュウガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラはブナ林で繁殖しているが、ゴジュウカラは山頂近くに限って棲息しており、ヒガラ、コガラなどは積雪期になると低地へ標行したり、また、県民の森の低いところでも見られるのと、対照的である。」と記していることを考え合せると、１９７３年は比婆山本来の鳥類相はカラ類が優占する鳥類相だったといえる。

これに対して１９８８年の場合、優占度の高い鳥類はなく、その上、里山の鳥であるウグイスとヒヨドリが加わっている。このことから比婆山連峰の森林植生に何らかの変化が生じているのではなかろうかと、疑いが持たれる。しかし、残念ながらこのことも解きようがない。



ゴジュウカラ（中村原図）

「つれづれ歌談」⑨

松岡 初枝

「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり」で始まる平家物語は、哀調を帯びた語りで知られていますが、合戦の様子や、平氏が滅びていく様が心に残る場面で溢れています。

歌に纏わる一節で忘れられないのが、薩摩守忠度（ただのり）の都落ちの話です。忠度は清盛の弟ですが、文武両道に秀で、藤原俊成（しゅんぜい）とは歌の師弟関係にありました。都落ちの際、忠度は俊成邸に立ち寄り、歌集を託しました。

・さざ波や志賀の都は荒れにしを
昔ながらの山桜かな
薩摩守 平忠度

志賀の都は荒れ果てたが、長良山の桜は美しく咲いている。この歌を「千載（せんざい）集」に、〝よみ人知らず〟として選んだ俊成は、秀歌を多く残した忠度の死を悼みました。この話は後に能や浄瑠璃にも残されています。

・ねがはくは花の下（もと）にて
春死なむそのきさらぎの望月（もちづき）のころ　西行法師

この時代は花と言えば桜になります。西行は桜の花が好きで、釈迦が入寂したとされる二月十五日（今の三月）の満月の頃に死にたいと願い、本当に一日違いの二月十六日に死んだそうです。願いが叶ったのですね。

・清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みな美しき　与謝野晶子

晶子は「みだれ髪」で一躍有名になった歌人ですが、情熱的な詠みぶりで知られています。小説、随筆、評論など多才の人で、源氏物語の現代語訳も手掛けています。

桜は、昔も今も多くの人の心をとらえる、美しくも儚い花と言えましょう。

あうん4

現代御伽草子㊸

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

カリカリと板を引っかくような音がする。

（まさかな）

座布団替わりの万年床から立ち上がって、音がする玄関に向かった。右ひざを曲げると痛むので、引きずるように歩いた。酒に煙草にギャンブル、長年の不摂生で、全身もうスクラップ寸前だ。八十過ぎまで生きられたのは、丈夫に産んでくれた両親のおかげだろう。

ドアの前に立つと、カリカリという音が止んだ。

「ニャー」

押しボタン式のノブのロックを外して、急いでドアを開けた。その隙間をすり抜けるようにして、三毛の子猫が入って来た。甘い声で啼きながら、おいらの足に頬を擦りつけた。

「本当にポンスケなのか？」

抱き上げて顔を確認した。ハチワレの額にピンクの鼻、ヒゲが生えている右の口元の毛がうっすらと茶色を帯びている。記憶の中のポンスケと同じだ。

本当はポンタという名前だった。隣の家族が飼っていた猫で、ドアをちゃんと閉めていなかったのか、いつの間にか部屋に入り込んでいた。

ツマミの刺身を一切れ投げると、腹を空かしていたのかガツガツと食べた。それからちょくちょく遊びに来るようになった。おいらもキャットフードを用意して、ドアを少し開けておくようにした。

子猫を抱いて、布団の上で足を投げ出した。頭から尻尾の先まで、ゆっくりと撫でてやる。子猫がゴロゴロとのどを鳴らして目を細める。尻尾をピンと跳ね上げるのも、ポンスケと一緒だった。寒い夜は、おいらの布団にもぐりこんで一緒に眠った。

しかし、ポンスケであるはずはなかった。もう十年以上も前に別れている。

夜半に、隣の部屋から話し声が聞こえた。風呂なし、共同便所の安アパートだ。どうやら、夜逃げの準備をしているらしい。

「あんた、猫はどうするの？」

「ぼく、犬の方がいいって言ったじゃないか」

「隣の人になついているようだから、置いていこうかね」

「いや、三毛猫の雄は珍しいと誰かに聞いたことがある。高く売れるかもしれねえ。邪魔になったら、いつでも捨てられるさ」

だったら、おいらに売ってくれよと心の中で叫んだ。でも、動けなかった。狭心症を患っている自分が、それほど長生きできるとは思えない。

「ひょっとして、ポンスケの子供か？」

問いかけても、答えが返ってくるはずもなかった。

玄関の方で、ガチャリとドアが開く音がした。

（ロックしたはずだが……）

図体の大きな男が姿を現した。白いマスクをしているが、吊り上がった鋭い眼光に見覚えがあった。二階の部屋に出入りしていたグループの一人だ。

「サツにチクったのはあんただろ？」

右手にサバイバルナイフを握っている。

「なんのことだ？」

しらを切った。夜遅くなるまで騒いでいたので、注意してもらおうと警察に通報した。その中に、不法滞在の中国人がいて、取り調べているうちに、ネット販売の取り込み詐欺専門の窃盗団だということが明らかになった。盗み取ったカード情報で高級品を注文して、偽名で借りた宅配ボックスに配達させる。加楷という首謀者がまだ捕まっていないで、指名手配中のはずだった。

「まあいい。おれは寛大なんだ。金でケリをつけようじゃないか」

ニヤリと笑った、ように見えた。

「脅す相手を間違えてるぞ。わしは生活保護をもらって暮らしている人間だ。余分な金など、あろうはずがないじゃないか」

「葬式代ぐらいは内緒で貯めているんだろ？」

おいらは苦笑を浮かべた。

「まともな人間ならばな。やっぱり、相手を間違えてるよ」

男が一歩、ブーツを履いた足を踏み出した。
「しばらく待ってくれないか。運よく万馬券でも取れれば、少しは払えるかもしれない」
恐怖心がないわけではなかったが、どうせ死に損ないだ。悲しんでくれる人もいないのだ。
「ふざけんな！」
炬燵を蹴り上げて、おいらの前で仁王立ちした。
「おれは、借りを作られるのが大嫌いでね」

手を伸ばして、むんずと子猫の襟首をつかんで持ち上げた。
「どうする？　おれは猫も大嫌いでね」
子猫の脇腹をナイフでなぞった。
「そこの箪笥の抽斗（ひきだし）にある金が全部だ」
五千七百二十七円、あと一週間分の生活費だ。
「利息分にもならんな。イテッ！」
抽斗を探って手が緩んだのか、子猫が暴れて腕を引っかいたのだ。
「このやろう！」
ナイフを振り下ろそうとした男の体が硬直した。毛を逆立てた子猫の体がみるみる膨らんだ。
（ライオン？　いや違うな）
強烈な獣臭が鼻腔を浸した。巨大な獣が咆哮を上げて男に突進する。衝突した、と思った次の瞬間には、棒立ちの男の姿だけがあった。巨獣は男の体をすり抜けて姿を消したのである。
（無茶をしたな）
口を閉じた吽形の狛犬が話しかけた。時間を遡る能力を持っている。
（猫の依頼を受ける神様もどうかしている）
阿形の狛犬が応えた。年齢を若返らせる能力を持っている。黄泉平坂神社の境内では、山桜の蕾がかなり膨らんでいる。
（口を慎め。さらなる神罰を受けるぞ）
（ああ、これぐらいですんで良かったよ）
後ろ足が破損している。ナイフを持った男の体をすり抜けたときに、邪心と命の蝋燭の灯芯をほんのちょっぴり掠め取った。その灯芯を猫のものに継ぎ足した。一年もあれば、あの老人と最後まで過ごせるだろう。
（悪も必要だぞ）
（わかっている）
善と悪、光と影、実と虚、両方があってこそ、世の中は均衡を保っている。
（われらは、人間界に長く居すぎたようだな）
哄笑が響いた。

カリカリと引っかく音に、まさかと思ってドアを開けた。ヨタヨタとした足取りで入って来たのは、薄汚い痩せた三毛猫だった。目ヤニで左目がほとんど潰れている。
おいらの顔を見上げて、ニャーとしゃがれた声で啼いた。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

＜広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円＞

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

節分や鬼が悪いと誰が決めし　近藤 昌平

梟鳴くカムイユカラの謡となり　冨久 光

真っ直ぐな道まっすぐに燕とぶ　片岡 正人

立春を過ぎても零下永江の庄　隆愚

ネジ巻けば春の振り子が動き出す　赤川 冬人

マニキュアの赤を塗る時若き日に
君に恋せし春を想ひき　松岡 初枝

投稿＆寄稿

候のことば「春分 初候」　隆愚

七十二候で三月二十日から三月二十四日を「春分 初候」といいます。別名「雀始巣」（すずめはじめてすくう）の候といいます。雀が巣を作り始める時期です。

いつも身近にいる雀。稲穂をついばむことから、農家に嫌われたものですが、子育てをする春から夏は、害虫を食べてくれる有難い鳥です。ところが近年、数が減っているそうです。屋根瓦の下など、雀が巣を作るすき間がなくなったのが原因だとか。

この時期、雀が隠れるほどに草が伸びることを「雀隠れ」といいます。若草の間で雀がかくれんぼ。そんな情景をいつまでも見られますように……。

「本好き」　赤川仁洋

新年早々にAさんの訃報を聞いた。時おり、読み終わった本を売りに来ていた。どちらかというとマニアックな専門書で、新刊本も多いのでネットに登録するとよく売れた。いささか儲けさせてもらったという印象がある。

一昨年の秋だろうか。ご無沙汰だったAさんが、かなりスリムになって来店した。

「もう少しで死ぬところだったよ」

胸の動脈瘤破裂で救急搬送、緊急手術で一命を取り留めたらしい。

笑うと無邪気な童顔になる。しかし、話すとなかなかの論客で「イヤ」という第一声が口癖になってしまっている。無意識なのだろうが、相手の言葉を否定するような感じで会話が始まるので、いつの間にか論争のようになってしまうこともある。

定年後の時間を持てあましているようで、「ついつい本を買ってしまってね」。新書版の「いかに生きるべきか」的なハウツー本の持ち込みが多いのも気になった。時間が余ると、迷い道も増えてしまうのか。孤高で生きるのは難しい。

運動とダイエットに熱中した時期があって、炎天下に遠路はるばる徒歩で来店、体調を崩して車で送って行ったこともある。車中、軽自動車は安全面で問題があると忠告された。人一倍神経質なのにどこか無頓着、わたしの次兄に似ているのだ。次兄は五十歳半ばで早世している。

Aさんの享年は六十五歳、心臓麻痺という診断だったらしい。「本好きに悪い人はいない」、上林暁さんの言葉が沁みる。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート

・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）
・土曜日（10:00 ～ 12:00）

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)

いざなみカード（愛称「な・み・か」）

・3 月 1 日より 1 万円分のプレミアムポイント（庄原市民限定）が使用できます。
・千円単位で現金をチャージ、1%の電子マネー追加、加盟店（「ほ・ろ・か」も使用可能）にてキャッシュレスで買い物が できます。
・買い物などの決算時に 200 円ごとに 1 ポイント（1 円相当）進呈。
・庄原市民以外でもカードが作れます。

※どら書房も加盟店として参加しています。

《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター (現地記者) 募集！

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

◇どら書房郷土資料本コーナー◇

郷土史関係の本や地元で出版された本、地元の方の作品集（短歌俳句小説等）、地元に関係する本を揃えています。非売品で閲覧＆貸出（無料）しています。寄贈も歓迎します。

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家（徳岡佛性坊）として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。
茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。
※天井が低いので頭上注意！

編集後記

◇本誌も今月号で丸五年、いささか疲弊しておりますが、まだまだ頑張ります。次の目標は……、控えめに六年です（苦笑）。
◇毎年二月は店内整理で休業しているのですが、知らないで来店される方もいて、ご迷惑をおかけしました。
◇今年もやるべきことが山積、在庫本の段ボール箱を積み上げていただけの和室を書庫に改装するために組み立てたカラーボックスは三十個。その他、陶芸作家の展示コーナーや書棚の整理のためにさらに十個、これがいちばん簡単で安上がり。
◇三月より新装開店、千客万来。九日市も久しぶりに開催予定で、楽しみです。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第 238 回

しょうばらくんちいち

「庄原九日市」

令和３年 ３月９日（火） 9:00～13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
３月８日～１０日　１０時～１５時
令和２年度庄原市文芸大会入賞作品展

★どら書房　→休憩所あります！！
月曜日と火曜日はお休みです。
但し、九日市の日は営業します。

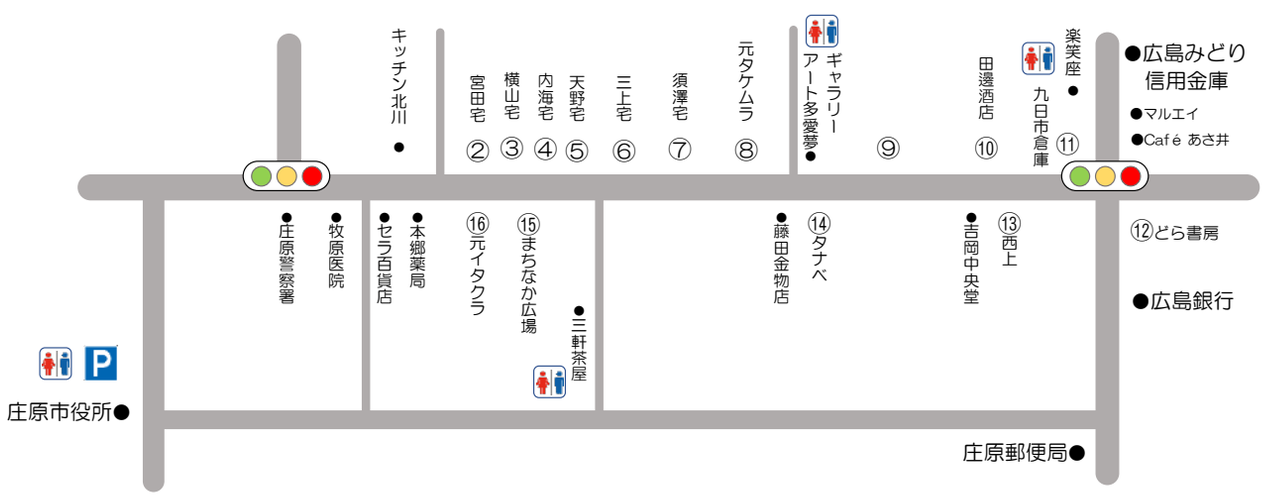
★楽笑座で「まかない食堂」中　止

★楽笑座で「うた声喫茶」中　止

★きくや　→総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍　→九日市スペシャルで餃子２００円！

出店配置図



②お休み

③文屋

④お福
郷屋

⑤工房アム
かぐや姫
ぬくもり
ちくちくはうす玉手箱
832ｇの奇跡

⑥めだかの学校
美・sfida・三次サロン
和み屋
クラフトショップ
Room of keiko
なかや

⑦農楽会

⑧とらぢ
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
健康企画
ふくふく牧場

⑩克國水産

⑪お休み

⑫どら書房

⑬久代水産
くんえん工房　香豚
吉備路花田ＦＦ

⑭まなべ商事
アパレルゴトー

⑮昭助
どんぐりーず
宮川屋
佐藤園芸
田崎屋
スプレモ

⑯お休み

出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ１枚スペース 1,000 円～　九日市愛好会事務局
〒727－0013　庄原市西本町２－１－10 楽笑座内　TEL/FAX　0824-72-8285

ホームページ
http:www.kunchi-ichi.jp